

Def busta ~legacy~

デ フ バ ス タ

～ レ ガ シ ィ ～



《第3章》

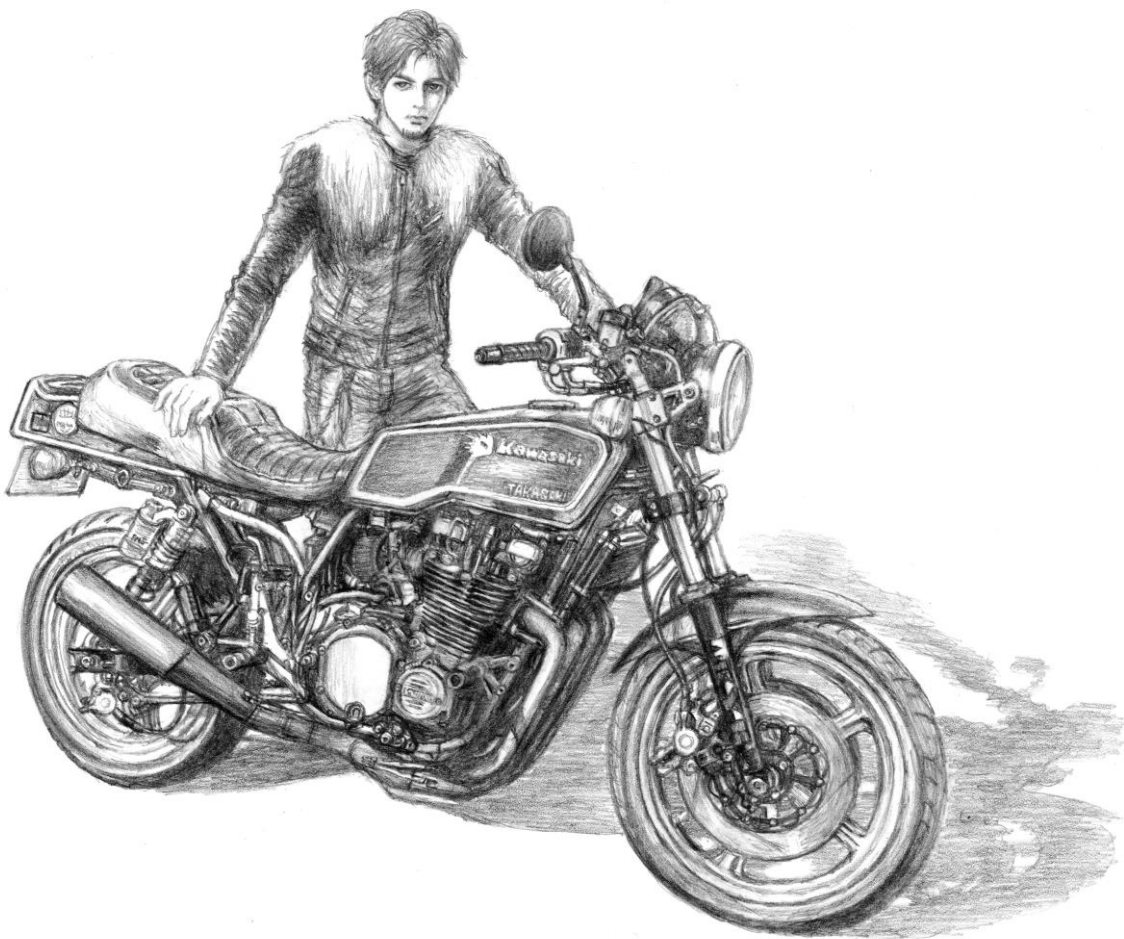
カービート北海道支局
支局長 むらっち2 著

人物紹介

● 下村 貴 しもむら たかし （24 歳・男）

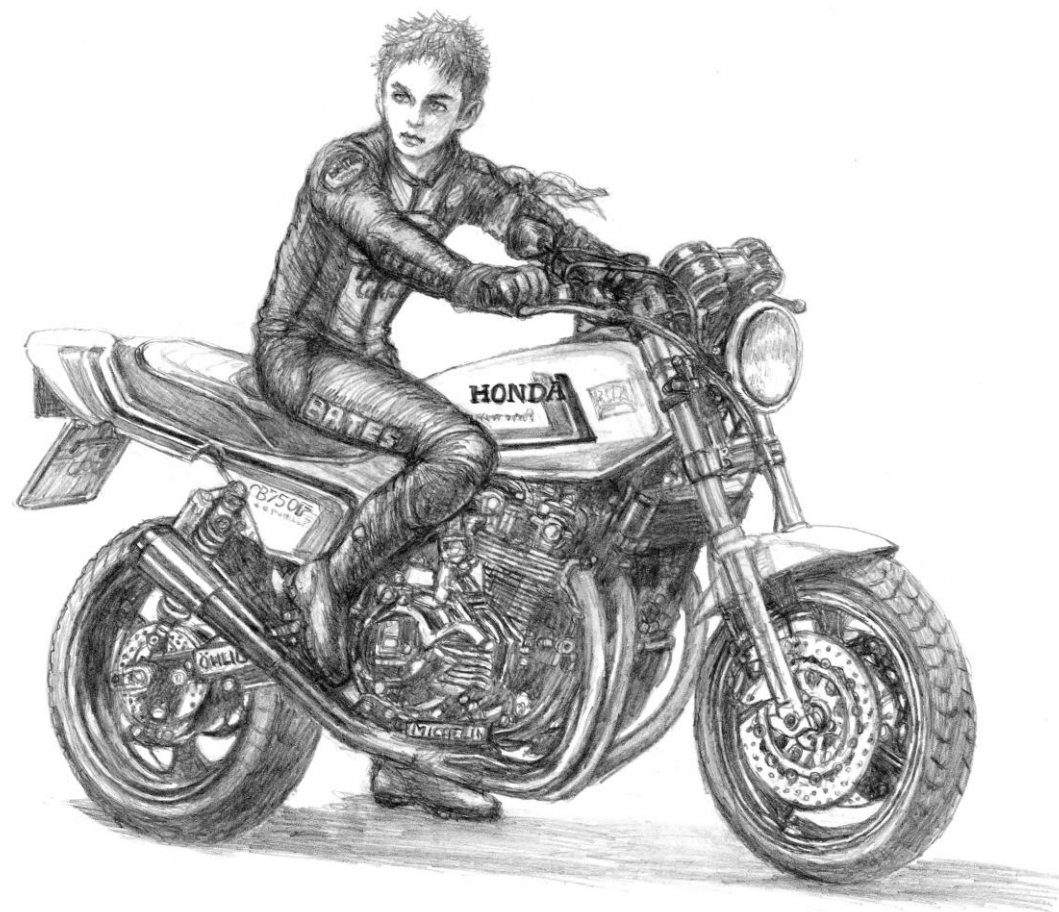
TEAM SANTANA のリーダー及び Garage SANTANA の代表。
過去に「Def husta 下村」と呼ばれていた。

Kawasaki



● 真田 修二 さんだ しゅうじ (22 歳 ・ 男)

も う 一 つ の SANTANA の リーダー 。 下村 の 後 輩 。



● 南 條 零 なんじょう れい （24 歳・女）
通 称 レイ。MBM 社を母体とする新興バイク
メーカ―KAMUI 社の若き女社長にして、南 條
家の令嬢。下村に淡い想いを寄せている。

● 牧 真 志 まき しんじ （24 歳・男）
下 村 の 悪 友 。 かつてはプロのキックボクサ
ーだった。現在は高利貸業を営んでいる。

● 府 月 周 遠 ふづき しゅうえん （23 歳・男）
HN 社の重役。KAMUI 零の一件以来、下村に深
い恨みを抱くようになった。

● 岩 野 剛 こむろ じょう （27 歳・男）
Garage SANTANA のスゴ腕メカニック。

● 進 藤 諒 一 しんどう りょういち （27 歳・男）
TEAM SANTANA のメンバー。職業は北海道警察
の私服警官。

● 坂本 仁 さかもと ひとし （22歳・男）
TEAM SANTANA のメンバー。通称ドラッグの坂本と呼ばれている。

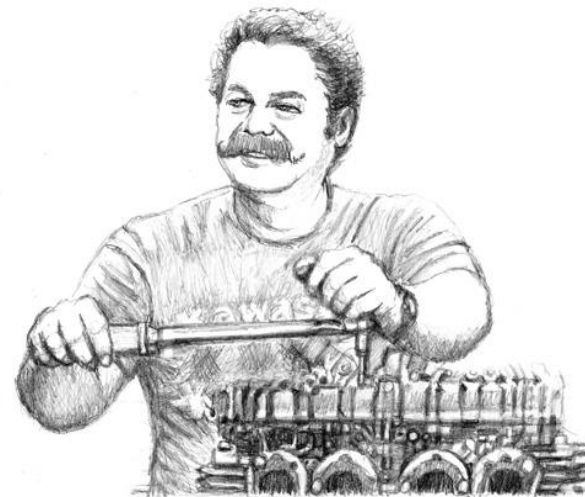
● 輪道 成海 りんどうなるみ （19歳・女）
TEAM SANTANA の新メンバー。3眼ライトの Kawasaki KX500 改（通称サードアイ）を駆る

● 堀井 士郎 ほりい しろう （28歳・男）
MBM 社を母体とする新興バイクメーカー「KAMUI」の特別顧問。

● 上場 見顎 うわばみ がく （25歳・男）
麻薬のジャンキー。デリヘル店を営業者していたが、現在は数多の犯罪容疑で逃走中

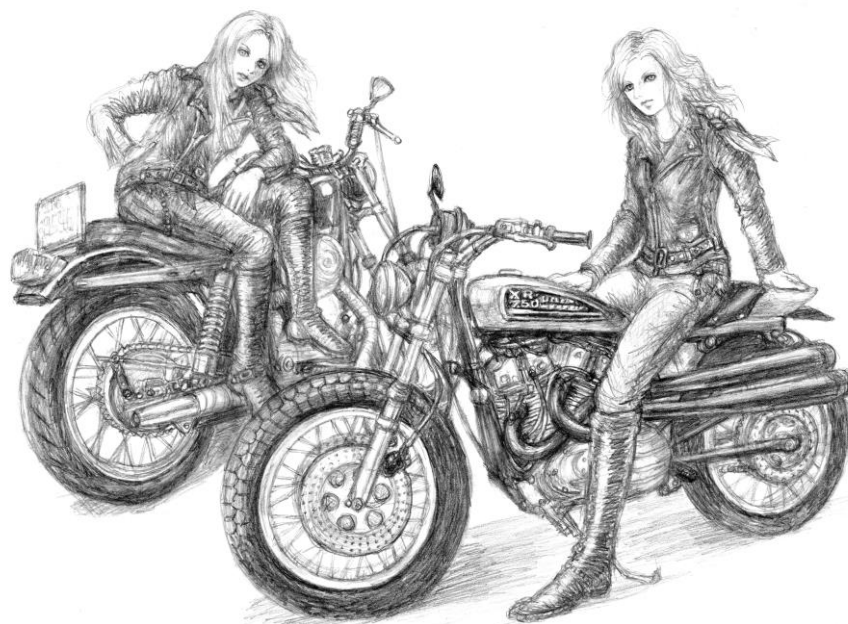
。

● 六部 本気りくべもとき（30歳・男）
通称 ロブ・マジー。謎のチューナー。



現在はコンビニエンス
ストアー（セイコーマ
ート）の雇われ店長。

● エミール & マリー
（24歳・女）
真田修二の側近に
して美しきボディ
ガード。ハーレー
ダビッドソン XLCH
と XR750 を駆る。
イメージキャラ・E-girls 藤井姉妹。



あらすじ

「Steele Runner（ステイール・ランナー）」それは、まだ不良少年だったあの頃、誰もが憧れた伝説の男。皆が彼のように成りたくて、バイクに乗り、誰もが彼の幻影を追った。しかし、ステイール・ランナーは。夢や幻じゃない。十数年ぶりに、その名を現代に甦らせ、二代目となった、もう一つのSANTANA・真田修二。

その真田を利用し、下村を付け狙う府月。あらゆる想いが交錯し、下村は渦中のステイール・ランナーを巡る闘いに、巻き込まれて行くこととなる。

ここに、己の想いとプライドを賭けた男達の、一大レースの幕が切って落とされる。

第 1 章 Steele Runner

1

道央サーキットは、TSW（十勝スピードウェイ）の全長3,405mクラブマンコースを模倣し建設されたサーキットであるが、各コーナーには様々な角度のバンクが設けられており、本場クラブマンコースより、2秒程度（速い）タイム差があると言われている。

この日は、これから北海道の一大レースイベントである「Steele Runner battle」（ステイールランナーバトル）が開催されようとしていた。

5番ピット、真田修二はベイツの革ツナギを着て、愛車・スペンサーカラーのCB750F（FB）を前に、ステップ回りの点検を行っていた。跪いたその姿は、まるで祈りを捧げているようにも見える。それは、背中に大きくペイ

。

ントされたチーム名『SANTANA』Saint Ana ≪聖なるアナ≫への礼拝にも似ていた。

「いよいよ今日、二代目ステイール・ランナーの誕生ですねえ。十数年ぶりに荣誉あるその名が復活するとは、今からわくわくしますよ」

修二の後ろから、非常に爽やかで物腰が柔らかく、紳士的な府月が声をかけてきた。端正な面立ちで、一つ一つの振る舞いに気品すら感じる程だった。

「府月さん：」

修二は立ち上がり、深々とお辞儀をした。

「それこれも全て貴方のお陰です。パーツ提供のみならず、資金まで出して頂いて：でも：どうして僕にここまでしてくれるのですか？」

「はっはっは、簡単な事です。ステイール・ランナーは皆の憧れ。その初代のバイクに拘り、それを復活させ、ましてや現代のマシンと同レベルになるまで改造を施して、その

。

名を復活させようとしている。そんな真田さんの情熱に、私は心を打たれたのですよ」

優雅なその振る舞い、声の音質、府月のそれは、男であろうと、女であろうと、たちまち虜にする。

「それに、今後は真田さんのように才能ある若い方がリーダーとなり、皆を牽引する指標となるべきなんですよ」

「はあ、でも本当に感謝してもしきれないくらいです。こんな僕に、何か出来ること」

「があれば言って下さい：あ、いや、僕ごときが貴方ほどの人に来る事なんて何も無い」

「ははは」

そのとき府月は“ニヤリ”と口角を吊り上げた。

「いやいや、真田さんのお気持ちちが本当に嬉しい。そうですね。一つだけお願いしたい事がありません」

「そう言い、府月はスーツの内ポケットから一枚の写真を取り出し、手渡してきた。する

、

と、修二は驚きの表情となる。
 「え？これって、下村：さん」
 「おや、ご存じでしたか？」
 それは確信犯の間이었다。さつきとは打
 って変わり、今度は顔を歪めた冷たい冷たい
 笑みとなる府月。
 「今回のレースで、貴方がステイル・ナ
 ンナーとなつた暁には、必ずこの男が真田さ
 んの前に現れるでしょう。そうなつた時、こ
 の男を完膚無きにまで叩き潰して欲しいので
 す」
 一瞬言葉を失う修二。
 「そんな：下村さんを：」
 修二の内で下村への、あらゆる想いが交錯
 する。過去の栄光、尊敬、憧れ。そして今あ
 る障害、義理、意地、自尊心。本当にあらゆ
 る想いだつた。
 ひとしきり思慮した末、意を決し答えた。
 「私怨ですか？：いや、すみません。そん
 なのは問題じゃないですね。彼は僕が超えな

くてはならない壁であり、目標でもあった。
「だけど：だけど：」

修二は急に表情を曇らせた。彼にも一抹の
苦い思い出があったのだ。

「うん。そう、私怨は僕の方だ：」

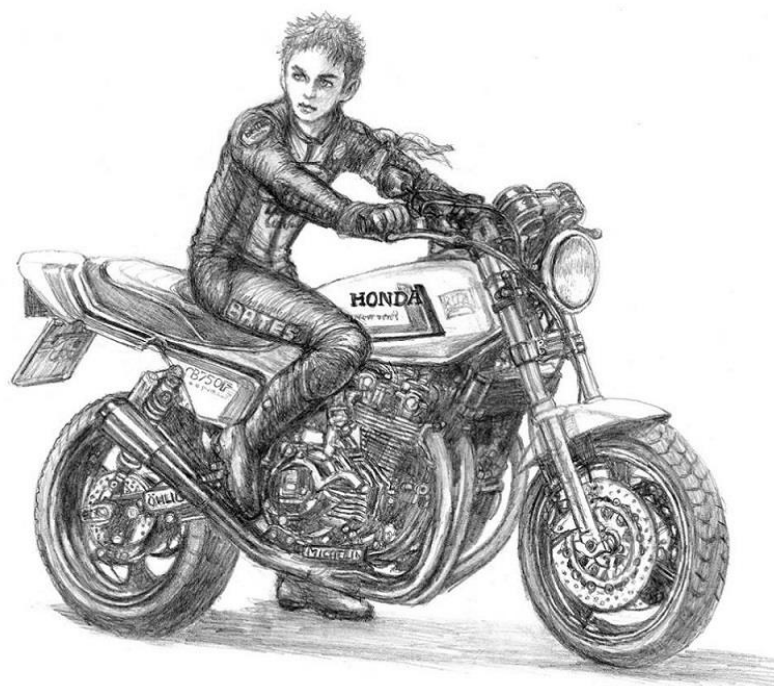
修二の顔つきが変わる。

「わかりました。彼は敵だ。必ず叩き潰し

てみせますよ：」

「はい。期待しております」

その言葉に呼応し、府月の冷笑は、更に冷
たさを増していった。



俺の名前は下村貴。学生だった頃のあだ名で“Def busta（デフバスタ）”なんて呼ばれる事もあるけど、ほとんどの奴は俺のことを下村と呼ぶ。

2年前、北海道の旭川市で、親父が残してくれたこのショップを継ぎ、『下村輪業』から『Garage SANTANA』と店名を変え、中古車の販売、整備、トランスポーターのぎ装なんかをメインとし、細々と営業している。

あ、もともとは、バイク屋だったんだけど、それだけじゃ、食っていけないってことで、親父は岩野を雇い、メカニックとして育て、クルマの整備を始めたんだ。で、今にいたっている。

ん？親父？ああ、親父はさ、死んじゃったその2年前にね。酒の大量摂取による、急性アルコール中毒だったと聞いている。親父はアルコール依存症だったんだ。だけど、依存

症がアル中で死んだなんて、シヤレにもならんよな……。でもそれは、酒で家庭を壊しちまった、寂しい男の末路……。かもな。

それで俺はというと、その頃は、帯広市のバイク屋で働いていた。親父の死に目にはあっていない。裁判所の命令でね。家庭の事情で、施設に預けられ、就職した後も減多に親父には会えなかった。

それから、このシヨツプとZ1000MK2、あと、デスペラードジャケットを相続した。これは親父の形見でもあるんだ。

『Garage SANTANA』はさ、なんていうのかな、不思議とこの店には、同じ匂いの仲間が自然と集まり、一つのチームが発足した。そして必然的に、バイクのモータースポーツにも、興じるようになり、『常勝軍団 TEAM SANTANA』なんて、呼ばれるようになった。

それに、ときおり、刺激的な事件も起こるしね。一退屈はしていない（笑）。つまり、まあ毎日それなりに、楽しくやっている。

がまだ低い、朝の清々しいこの時間に、Garage
SANTANAの玄関前を、掃除するのが好きだった。
別に掃除が好きってわけじゃなくて、こんな
のんびりした瞬間が、ただ好きなだけなんだ。
一つ、大きく伸びをして、まだ冷気を感じ
る新鮮な空気を、胸いっぱいに取り込むと、
全身の細胞が、瑞々しく生きてくるのがわか
った。
そんな気持ちのいい朝、俺はムーンアイズ
“アイアンクロス・玄関マット”の埃を、ほ
うきで掃っているのと、店先の歩道に、一人の
男が立っているのが見えた。その男は、俺と
眼が合うや否や、音も無く近寄ってきた。最
初は「客かな？」とも思ったが、違うことが
すぐにわかる。男が近づくにっれ、俺の肌は
ヒリつき、背筋には寒気が走る。それは明ら
かな殺気だった。
こちらもとっさに身構えたが、その男の顔
を見た時、更にヤバさを感じた。その顔には
表情が無かった。笑うでも、怒るでも、睨む

。
。

でも、泣くでもない、いわゆる能面のような、
無表情つてやつだ。つまり、これだけの殺気を
を放ちながら、表情を消すことができるって
のは、相当な訓練を受けたか、数々の修羅場
を潜り抜けた猛者。一そうとしか考えられない
「やっべえ。」
ついそんな言葉を、漏らしてしまった。その
男は鋭く踏み込んできて、高速のワンツ―
スリ―、右ローキックを、コンビネーション
で打ち込んできた。が、そんな程度の攻撃を
かわすのはわけもない。
「ヒョウー。」
ウェービングでパンチを避け、左脚でロー
キックをガードしたと同時に、短く息を吐き
左右のワンツ―と、右前蹴りを返した。
「あっ。」
ミスった。一不注意に出してしまった前蹴り
それを交わした男は、胴タツクルに入ってく
る。しかもコイツの頭は、フロントチョーク
を取られないような位置、つまり俺の胸元付

。

、

。

、

近にあった。
 『転がったらヤ（殺）られる』本能がそ
 う叫んだ。マウントポジションから、次々と
 打ちおろされる拳を、一瞬でイメージしてし
 まった時、俺の中で完全にリミッターが外れ
 戦闘スイッチがONとなった。
 これは試合じゃない、ケンカなんだ。こ
 の訳の分からない輩は、間違はなく俺をヤ（
 殺）りに来ている。
 「くそつたれー」
 俺は体幹の強さだけで、こいつの胴タック
 ルを止め、右手で背中を掴み、左腕は、相手
 の頭を抱えるような状態となった。
 「んっだらああああー」
 一切容赦はしなかった。相手の頭を抱えて
 いた左手で、男の左耳を掴み、何のためらい
 もなく、思い切り後方へ引き千切ってやっ
 俺の万力ののような握力からは、決して逃
 れん。

。

、

音をたて、耳が千切れるその感触は、雑草の束を鷲掴みにして、引き抜いた感触にも似ていた。そこで男は始めて声を上げ、喚きながら俺から離れた。さっきまでの能面のような表情は、人の“それ”に変わっていた。――もらったあ―――

すでに俺は、相手を一撃で仕留める技を持つて、確実に決める距離にいた。極限まで捻じった右腕を、肩口に折り畳み、一気に力を爆発させようとしていた。それは、今までどんなヤツだつて、確実に仕留めてきた、必殺のコークスクリューブローだつた。

――終わりだ――

拳を突き出す瞬間だつた。視界の端に何かが映つた。戦闘スイッチの入つた俺の感覚は、極限まで研ぎ澄まされている。故に、感じ取つた新たなる危険だつた。

――くそっ――

自分の突進力を一気に相剋し、反作用になるスウェーバックで、こちらに飛んできた物

体をかわす。その物体は、革のブリーフケースだった。目の前を勢いよく通過し、その後、鈍い音をたて地面に転がり、その衝撃で、蓋が開いた。と思いきや、中からは、大量の札束がこぼれ落ちてきた。俺は対峙していた男から、決して眼を離さないように、バックステップで距離を取りつつ横目で新手を確認する。だがそこで、思わず驚いてしまった。それは、思いがけない人物との再会となったからだ。「あん？お前、まさか：、シンジ？シンジじゃねーか」

新手の男は、かつての悪友、牧真志だった。オールバックに撫で付けられた頭髪、ダークスーツに、チャコールグレーのYシャツ。それと、こんな大量の札束まで持ち歩き、すっかりと変貌を遂げていたので、ヤクザにでもなったのか？と、少々勘繰った。懐かしさとい

うより、常にケンカをしている、苦い思い出
 しかない。コイツはガキの頃から、キックボ
 クシングに慣れ親しみ、いつもそのテクニッ
 クで、俺をサンドバック状態にしていたのだ
 からな。俺はまだ警戒を解かなかった。
 「よう、久しぶりだな。って、もうそんな
 に警戒すんなよ、ケンカは終いだ」
 「あん？手前え、一体どういうつもりなん
 だ？」
 そんな、今にも噛みつきそうな俺を尻目に
 シンジは怪我をした男の元に歩み寄り、耳の
 状態を確認し、こう言った。
 「もういいだろ。早く手当てしてこい」
 そしてその男は、シンジに一礼し、その場
 から立ち去った。やはりネコ科の動物のよう
 に、音もなく消える。しかしどういう事だ？
 事情が全く飲み込めん。
 「おいシンジ」
 「ああ、待て待て、悪かったよ下村」
 今度は急に謝りだした。何だっていうんだ

よ？ 「俺は、いや、俺達はな、数年前から札幌
 で高利貸しをやっつてんだ。相手が誰であらうと、
 どんないんな奴であらうと、きっちり取り立て
 る。それがモットーだ。けど、そんなアン
 ダーグラウンドな世界じゃ、理屈が通じない
 場合もあつてよお、俺達はどんな奴にも負け
 ない力が、どうしても必要になる時がある」
 シンジはそう言いながら、地面に散らばつ
 た、札幌の埃を払いながら、ブリーフケース
 に納めていった。
 「先代から、いや、オヤジからこの稼業
 を受け継いだ時によお、俺を慕つてついて来
 てくれた若い奴が、3人もいてな」
 この場合の“オヤジ”は実父ではなく、組
 長、社長、カシラ、まあ、そんなとこだ。
 「今の奴は黒崎つてんだけど、俺が育てた
 中でも、とびきり優秀なんだ。取り立てに関
 しても、腕っぷしに關してもな」
 「だからつて、なんで俺に殴りかかってく

んだよ？お前から借金した覚えなんて無えぞ」

「ああ、そこなんだ。黒崎はな、あまり自分の感情を、表に出す奴じゃ無えんだけどよ、お前に会いに行くって、俺が言っただとたん、どうしてもお前と立ち合いたいって、頑として譲らず、ここまでついて来ちまったんだ」

シンジは頭を掻きながら、困った表情を見せた。

「ま、なんて言うか、俺がお前の事を、大袈裟に話し過ぎたのかな。一度でいいから、本気の“Def busta 下村”と闘いたい。って言い出してな：でも、まさか、こんななあ：手痛い授業：いや：」

言葉を選ぶ。

「いや、いい勉強になったな。お前みたいなバケモンが、現に存在してるってな」

「おいーなにを勝手に：テメツ：ああ：くそ：」

どうにも後味が悪過ぎる。

「わぁーってるよ、アイツだって覚悟の上
だ、文句は言わん。でもお前、最後に狙って
たのは、右のコースクリューだろ？そんな
ん貰っちゃまった日にゃあ、黒崎がぶっ壊れち
まうからなあ、途中で水入りさせて貰ったん
だ。しかし……」
シンジは一瞬口ごもった。
「しかしソイツは、元々俺の技だろ。それ
を俺とのケンカの中で盗んだうえ、自分の技
として、完全に昇華させちまいやがってよお
：全く嫌な奴だよお前は」
「おい、そんな事より、お前はいったい何
をしにきたんだよ？」
「はっは、そうだ、それそれ。お前、真田
修二を覚えてるか？」
「あん？真田って、俺達の後輩だった、あ
の修二の事か？」
「そう、その修二だ。高校時代、お前が作
ったチーム『SANTANA』で、唯一バイクの走り
で、お前に付いていく事が出来た、天才と呼

ばれたあの男だ」
「おう懐かしいな。元気にしてんのか？あ
いつは」
「ああ、元気どころか、今あいつは、二代
目のステイール・ランナーに成ったんだぞ」
ステイール・ランナーだとは一瞬我が耳を
疑った。その名は、俺達がまだ、街の不良少
年だったあの頃、誰もが懂れた、伝説の男の
名前だ。皆が彼のように成りたくて、誰もが
彼の幻影を追った。
『まさかあの修二が：』俺の中で、何度も
何度も、修二の無邪気な笑顔が、反すうされ
ては消えていった。

俺達は、Garage SANTANAの事務所内で、スツ
 ルに腰掛け、淹れたてのコーヒを啜りなが
 ら、昔話に花を咲かせていた。
 「親に捨てられた俺（シンジ）。母親に死な
 れ、保護者不適格の烙印を押された父親から
 引き離されたお前（下村）。そんな俺達が出会
 ったのは、あの札幌の児童養護施設：、中1
 の春だったな」
 「ああ、出会ったその日にもうケンカだ。
 笑っちゃまうよな。でもお前はキックボクシン
 グをやっていたろ、俺は毎日負け通しで気分
 が悪かったぜ」
 「はっーそんなお前は俺とケンカする度に
 どんどんテクニクを盗んでいきやがってよ
 ぉ。気分が悪かったのは俺の方だぜ」
 「お互いバイクに出会うまではよくケンカ
 をしたな。行き場のない感情を受け入れてく
 れる器が無かった。とでも言うのかな：。あ

の常にイラつく激情……。眼に映るものの全てを
 壊してやりたくってな。あの頃の俺等は人間
 じゃ無かったな（笑）
 「はは、全くだ。それよか下村、バイクつ
 ていやあ、あの当時乗ってた“ゼファ―400
 改”はまだ持ってたのかよ？」
 「もちろん。あの誕生日に親父が贈ってく
 れたバイクだからな。大切に持ってるよ。裏
 の倉庫で眠ってる」
 「おうおう、でもあのゼファ―は反則だろ
 おい？ 550 エンジンベースに、ワイセコピスト
 ン組んで 615cc にボア（ボアアップ）。でツイ
 プラグ。敵わないわけだよなあ」
 「ああ、でもお陰で楽しい高校生活を送れ
 た。ところでお前は？ まだ KH400 は持ってるの
 かよ？」
 「いや、残念だけど……。ありやあ沖縄でス
 クラップにしちまった。色々あってな……」
 急にシンジの表情が曇ってしまった。
 「プロライセスも剥奪され、病気で肺も

潰れてよお。今じゃ1分もまともに動けねえ
そんな時、オヤジに拾われてな。新しい人生
を貰ったんだ。――
「そうか？」
俺は言葉に詰まってしまった。シンジのラ
イセンス剥奪は知っていた。試合中、相手選
手の度重なる故意のバッティング（頭突き）
にブチギレてしまったシンジは、ダウンを奪
った際、馬乗りなつて相手を殴りつけ、失明
させるほどの重傷を負わせたのだ。その後、
シンジは行方不明となり、俺は帯広、旭川と
移り住み、このショップを受け継いだ。お互
い本当に色々あったのだ。
「下村よお、暗い話は止めようぜ、それよ
か修二だよ。一ステイール・ランナー」
「おお、まさかアイツがなあ。ケンカの腕
はからつきだったけど、バイクに乗った時
はなかなかだった。当時は89式のNSR250Rに乗
ってたよな。走り出して半年も経たないうち
に、俺のケツに張り付いてくるようになって

それで天才なんて呼ばれるようになってよ
 おー
 「そう、そして間もなくチーム『SANTANA』
 は解散する……。だけどアイツは走り続けてい
 たんだ。今は苦小牧市の、自動車部品工場の
 期間社員だと聞いた。バイク文化が独自に発
 展したあの街で、アイツは一人、SANTANAを名
 乗り走り続けていたんだよ」
 俺は無言で、シンジの話に耳を傾けた。
 「そして、どういう経緯かは知らんが、奴
 は初代ステイール・ランナーのCB750Fを手に入
 れ、現代に蘇らせる。で、先日行われた
 『Steele Runner battle（ステイールランナーバト
 ル）』で見事勝利し、十数年ぶりに二代目が
 誕生したってわけだ」
 シンジは少々興奮気味に語った。
 「ああ、そのバイクは知ってる。スペインサ
 ーカラーのFだ。いや誰もが知ってる。皆の
 憧れステイール・ランナー……。まさかそのバ
 イクを」

「そうだ。Iron bound（アイアンバウンド『鉄
張り』と呼ばれる、レースウィークに開催さ
れる『Steele Runner battle』。ドラッグ、ストリート
サーキット、全てのステージを同じバイクで
駆け抜け、全てを勝ち取った、タフな者だけ
が名乗れる称号“ステイール・ランナー”
だ」
シンジの身振り手振りが大きくなる。
「あまりにも過酷。だからこの十数年、キ
ングは不在だったんだ。初代以外は誰一人と
して達成出来なかったからな。これは大いな
る偉業なんだよ」
顔が少々紅潮していた。シンジはまるで自
分の事のように楽しげだった。
「アイツはやった一やったんだ」修二のヤ
ツはキングの座を見事にもぎ獲ったんだ
よ」
CB750F。修二が駆るキングのバイク。「ふう
」思わずため息が漏れる。過去、自分も憧
れた、初代ステイール・ランナー。ストリー

トを颯爽と駆ける、あの勇壮なる姿。
ふとそのイメージを修二と重ね合わせた時、
自分の中に嫉妬心が生まれていたことに気付
き、つい驚いて思わず苦笑してしまった。

5

それから次の週末が、非常に待ち遠しくて
しかたがなかった。なんせ、シンジの奴が
「今度の週末、苫小牧市でチャリテイーイベ
ントのバイクフェスタがあるぞ」なんて、
言い残していきやがったもんだから、そわそ
わするのなんのって。
修二がその中心に居ると思うと、いてもた
ってもいられなかった。だけど、どんなに気
が急いても、時間が早く過ぎることにはなく、
ましてやその逆で、長く感じてしまったりす
るから非常にタチが悪い。まるで遠足を心待
ちにしている子供と一緒にだな。

しかし、俺のそんな様子を見ていた岩野が
 「なしたんスカ？」 「なしたんスカ？」 と何
 度も尋ねてくるのが、とてもうっとうしかつ
 た。 うん、本当にうるさい奴だ。 いや、なん
 かムカつくなあ。 。 そう、この時決めたんだ
 俺は絶対に理由を言わない事にした（笑）。
 そんな日が数日続き、ようやく日曜日とな
 る。 定休日ではないので、ショップは開店し
 ているのだが、岩野がここ数日、非常にうる
 さかったのので、仕事を全部押しつけて、俺は
 Z1000Mk2 に跨り、一人で苦小牧市に向かう事に
 した。
 「なしたんスカ急に？ 何があったんスカ？」
 教えて下さいよ。 おお、なんて言い出
 したので、ちよつと可哀想だなと、3秒ほど
 考えたが、デスペラードジャケットに袖を通
 し、バイクで走り出した途端、そんな事は全
 て忘れてしまった。

。

抛。『 Ride (ライド) 』 している 』 じゃなくて 』 証
 そう、それは、バイクに『 乗れている 』
 「 ノレてる 」
 た よ う な 一 体 感 が 生 ま れ る 。
 こ か ら 、 腰 と リ ヤ シ ョ ッ ク ま で も が 、 同 化 し
 リ パ ー が ロ ー タ ー を 掴 む 感 覚 が 宿 る 。 更 に そ
 ト フ オ ー ク に 同 化 し 、 右 手 の 指 先 に は 、 キ ャ
 走 れ ば 走 る ほ ど 、 俺 の 腕 は バ イ ク の フ ロ ン
 係 な い 。 逸 る 気 持 ち が 高 揚 を 抑 え き れ な い 。
 は 。 少 々 横 風 が き つ か っ た が 、 そ ん な の は 関
 シ タ ー チ ェ ン ジ に 向 か っ た 。 鷹 栖 、 奈 井 江 間
 ジ ャ ン ク シ ョ ン を 経 由 し 、 一 気 に 苦 小 牧 東 イ
 俺 は 旭 川 鷹 栖 イ ン タ ー チ ェ ン ジ か ら 、 札 幌
 「 高 速 道 路 さ ま さ ま だ ね ♪ 」
 到 着 出 来 る よ う に な っ た の だ か ら な 。
 て い た 場 所 で も 、 も の の 数 時 間 で 、 目 的 地 に
 的 に 進 歩 し た 。 以 前 な ら 、 半 日 か け て 移 動 し
 こ こ 数 年 、 北 海 道 の 高 速 道 路 事 情 は 、 飛 躍

ノれてる』んだ。
 オートバイという乗り物は不完全である。
 自分単体では立っていることも出来ない。止
 まれば倒れる。そんなオートバイは『バイク
 乗り』という意思が居ないと、完全な姿には
 ならない。そして共に求めるものは『スピ
 ド』。
 は、かの巨匠はほんとよく言ったもんだ
 ね。『言い得て妙』全くそのとおりだよ。
 200Km/h 巡航、エンジンのタレ無し、車体も安定
 そこから更にアクセルの鞭を入れ、Z1000Mk2を
 加速させた。
 途中、白黒パンダの車が停まっていたが、
 気にせず加速する。そいつはルーフ上に設け
 られた不細工な飾りを、一瞬赤くチカチカッ
 とさせたが、ただそれだけで、とくに追っ
 はこなかつた。

。

今や北海道の一大工業都市となった苫小牧市。あらゆるメーカーの工場があちこちらに立ち並び、そこには膨大な数の期間社員達
 が働いている。

しかも、雇用は雇用を生み、街には個人経営の飲食店や、バイク、クルマのショップが軒を連ね、ちよつと郊外には巨大ショッピンググモールまでもが進出しており、主要道路は片側6車線ときている。またそこにはアメリカ力並みのトレイラーヘッドがばんきり走り回り、荷積みが完了した箱（トレイラー）を連結させては次の目的地に向かう。

俺は道路際に面したコンビニ（セイコーマート）の駐車場にバイクを止め、ジョージア・エメラルドマウンテンブレンドのブラックコーヒーを飲み、産業の動脈ともいえる営みに、ひとしきり感心しながら休憩を取って

た。そんな時、店長と思われる初老の男が店

から出てきて、タバコをくわえながら話しかけてきた。

「やあ、旭川ナンバーだね。A3のお兄さん」

「おっと驚いた。Z1000MK2の事をA3と言うなんて。」

「初期型だろ、それ？」

「ええ、そう。詳しいんだね」

「はは。まあな」

少々小太りの店長だった。その言動に嫌味はない。むしろ有効的な態度ととれる。

「あ、あいつら……。おい見てみな、エミールマリ―だ」

なんだ？店長の指さす方向、目の前の交差点。そこに現れたのは2台のハーレー・ダビッドソンだった。トレ―ラーヘッドの排気音に負けないくらい、すごい爆音をまき散らし

ている。

二台ともスポーツモデルのようだが：いや
違いうーソリッドブラックの車両は、Kフレ
ムのレーサー、ハイコンプレッションモデル
のXLCHだ。それにもう一台、オレンジのダ
トラ仕様、コイツも何か様子が違う。俺は目
を凝らしながら小さなオレンジタンクの文字



をよく見つめた。そこに書かれていたのは。
 「ああん! XR750 だと!!」
 驚いた。XR750 だ。コイツは高圧縮比のスペ
 シヤルヘッドを組み込んだワークスマシンだ。
 ハーレー唯一の後方吸気と前方排気システム
 を持ち、フロントフォークには当時のレーサ
 ーの定番、イタリア・チェリアーニ GP フォー
 クが採用されている。
 「おいおいどうなってる!」
 この二台、こんな貴重な個体が、この街で
 平然と走っているなんて。日本ではあまり知
 られていないが、ハーレー・ダビッドソンは
 創立当初から、モータースポーツに並々なら
 ぬ情熱を注いできたメーカーだ。特に象徴的
 なのは、アメリカで高い人気を誇る“ダート
 トラック”と呼ばれるダート周回レースだ。
 古くから AMA は、ワークス体制で専用マシ
 ンを AMA のダートトラック選手権に投入し、
 華々しい活躍を続けている。
 「すごいな、オイ」

。

感嘆の声が出てしまった。それを聞きニヤ
りと笑みを浮かべる店長。
「XLCHがエミィでXRがマリー。この街の名
物姉妹だ」
そう、乗り手は二人とも女なのだ。ダース
ベーダーを連想させられるブラックのシンプ
ソンM30からは、長い髪がなびいている。それ
にタイトなダブルのライダース、左肩のエポ
レットには赤いバンダナを結び、細いウエス
トラインは形の良いヒップと非常に良くバラ
ンスしている。
そしてお決まり、交差点ではシグナルグラ
ンプリヘゼロヨンが突然始まったりするも
んだ。まあ、こんなところでレースをやるなっ
て方が無理だよな（笑）
更に感心したことがもう一つ。女共の後ろ
についている数台のトレーラーヘッドは、目
の前のバイクを無駄に煽ったり並んだりもせ
ず、ちよつと距離を置き二人の様子に興味津
々で眺めていた。

つまりこの街では、バイクもクルマも独自の文化が發展しているからこそ、ことモーターズのポーツの分野においては非常に理解がされて
いる。というか、乗り物好きが大勢いて、自然とチームが出来上がり、様々なイベントを催すようになった。当然、皆がバイクやクルマを楽しんでいる。そんな感じだ。
「はっは。そろそろだぜ」
なおも楽しそうな店長が言う。
2台のハーレーはエンジン回転を上げ、クラッチを繋ぐタイミングを虎視眈々と見計らっていた。そしてレッドシグナルからブルーシグナルへ。
けたたましいほどのエキゾーストノートとスキール音。まさにロケットスターだった。「すげえ」
「うー」
ついに口に出た。上手いーそれが感想だ。絶妙なクラッチワーク。あつという間に走り去った。なんと来ても早々、良いもんを見せて貰った。

。

「良い音だ。ちゃんと維持できている。
それにしてもあいつら、この交差点で信号
に捕まるたびに必ず2人でゼロヨンやるん
だよ」
楽しそうな様子の店長。なんだか、俺もム
ズムズしてきた。Z1000MK2に火を入れヘルメッ
トを被った。
「ああ、こつちも良い音だ。1105 … いや
1135cc か、相当なハイチューンだな。」
オイオイーまったく何者だよこの人は、
音を聞いただけで言い当てやがった。
でも一つわかった。このイカレた街は、た
とえコンビニの店長であろうと女であろ
うと全く持って油断ならねえな（笑）。
しかし、期待は高まるばかりだ。

それから、何か少しでも情報収集をしよう
 と思い、給油も兼ねエネオスのガソリンスタ
 ンドに立ち寄った。
 「いらっしやいませー」
 元気な声が響き渡り、若い店員が駆け寄っ
 てきた。名札には『田城』“たしろ”と読む
 らしい。
 そんな田城は落ち着きのない様子で俺の姿
 と、バイクをあれこれ見た後、少し“ほっ”
 とした様子で話しかけてきた。
 「いやー、びっくりしちゃった。旭川ナン
 バーっすねオニーさん。バイクフェスタに行
 く途中っすか？」
 ん？何がびっくりしたんだ？
 「なにか驚いたかい？」
 つい聞いてしまった。
 「ああ、すみません。いや、どこのチー
 ムの人かなって、思ったもんで」

「ああ、そういうこと。縄張りみたいなの？」

「そうなんす。それらしいバイクやクルマのお客さんは、まず新規では入ってこないんで」

なるほど。つまりこうだ。誰かしらチームの人間がそこに勤めているとか、OBがいるとか。この街じゃ、そんな感じに繋がった固定客が大半だと言いたいんだな。

「ところでオニールさんは、ステイール・ラナーに会いに来たんすか？」

ああ、そのとおりだが：

「今日のフェスタはSANTANAが催してんすよ」

ああ、そうなんだ：

「いやあ、自分も行ったつすよ。このフェスタの売り上げってね、自分たちの収益にするんじゃないかって、恵まれない子供達へのチャリティーイベントなんすよ。」

ああ、そうなんだ：

「あっーそうそう、いま SANTANA の人達、少
しピリピリしてるから氣を付けた方がいい
すよ」
ああ、それしても君はよくじゃべるなあ……
「え」と……“人達”って？ チームなのかい
？」
「そうなんすよ。ステイール・ランナーの
所属する、チーム『SANTANA』っす。いまサイ
コロにクールなチームなんすよ♪」
ああ、キミなんだか楽しそうだなあ……
「で、イチヤモン付いたりするのは、絶対
にダメっすよー何故なら、ステイール・ラン
ナーには常にボディーガードが近くにいて、
そんな連中はそく排除されるんすよー」
「はあ？ ボディーガードお？」
なんじゃそら？
「ええ、ええ。たまに走りで勝てないハネ
ッ返りが、ステイール・ランナーにケンカふ
っかけたりするんすよ。んで、おっかねーボ
ディーガードがそういった連中を排除して、

ステイール・ランナーには走りに集中して貰うって寸法なんす」

「ああ、なるほど。それは有益な情報だな。」

「それでね、それでね……」
田城はすっかり話に夢中になり、給油の手が少しおぼつかない様子になってきたので、

俺は一瞥してからこう言ってやった。

「おい、こぼすなよ」

“はっ”とした顔の田城。それから妙に脅

えた様子となり、彼は黙って給油を続けた。

あれれ？脅かすようなことは、何もしてない

つもりだけ……

9

バイクフェスタのイベント会場は、少し郊外にあった。元は小型飛行機の滑走路だったらしいのだが、現在は使用されておらず、こ

ういった催し物が開催される時に開放し、利

用さ
 れて
 いる
 のだ
 とい
 う。
 コレ
 もア
 レだ
 ね、
 行政
 のや
 る3
 セク
 へ第
 3
 セク
 ター
 の失
 敗例
 の一
 つつ
 て訳
 さ。
 でも
 用
 途は
 違え
 ど、
 こう
 して
 大い
 に利
 用さ
 れて
 んだ
 から
 、ま
 あ、
 良い
 んじ
 ゃね
 ーの
 。と
 、俺
 は思
 う。
 それ
 にし
 ても
 、人
 と出
 店の
 数が
 凄
 い。
 縁日
 でよく
 見る
 よう
 な屋
 台は
 もち
 ろん
 、ヘル
 メツ
 ト、ウ
 ェアー
 類を
 売る
 店、
 パー
 ツ屋
 、個
 人の
 フリー
 マー
 ケツ
 ト、
 なん
 でも
 ござ
 れだ
 。
 なか
 でも
 一番
 目を
 引い
 たの
 は『ウ
 オツ
 シュ
 屋』
 なる
 存在
 だ。
 つま
 りこ
 いつ
 は、
 1回
 三千
 円で
 、バ
 イク
 を洗
 車し
 てく
 れる
 のだ
 が、
 普通
 そんな
 事に
 、そ
 こま
 で金
 を使
 った
 りは
 しな
 いだ
 が、
 その
 洗い
 手が
 ビキ
 ニを
 着た
 モデ
 ル並
 みの
 美女
 だっ
 たら
 どう
 だい
 ？
 気な
 なる
 だろ
 ？
 洗う
 のだ
 。ど
 うだ
 い？
 気な
 なる
 だろ
 ？
 ウー
 屋『
 シヤ
 ワー
 屋』
 『シ
 ヤツ
 カッ
 ト屋
 』
 『ポ
 ー
 ル
 ダ
 ン
 ス
 屋』
 『タ
 ト

。

に『チョコバナナショー実行員会』？もうな
んだか訳がわからない。
音楽に合わせ踊っている奴、ビールを飲み
過ぎてフラフラな奴、ナンパに精を出してい
る奴。まったく様々だ。それに女達のファッ
ションも過激で、ビキニの上に破れたTシャ
ツや、ショートパンツを身に着けている。こ
れはさっきの『カット屋』で切ったのかな？
あと、チーム看板が背中に入った、Gベス
トや、革ジャンを着た奴もたくさんいる。ま
あ、なんにせよ楽しい雰囲気が出ているイ
ベントだ。
「さて、どこにいるんだ修二……」
俺は修二の姿を探した。

人ゴミのなか、辺りを眺めながら、ふらふら歩いていると、突然前方から、怒声が響いてきた。

「おい テメエー ー ● × △ ※ ♪ ニー」

途中、なにを言っているのか聞き取れない周りの人達もどよめきと共に、その声の方向を目指し、あつという間に人だかりのステージをつくってしまった。

「はは、修二 みつけた ♪」

どうやらそこは『SANTANA』のブースだった。修二はもちろんだが、10人ほどの仲間とCB750F

ステイール・ランナーのバイクが、堂々と展示されていた。

「テメエー、俺あゼツテー認めねえー」

尚もその男は喚いた。素肌の上に着た革ベストの背中には『BAEL（バエル）』と書かれている。

「東の悪魔王か……」
「なかなか面白い名前を付けるもんだ。俺の
いた施設はカトリック系だったからな。そう
いうのはなんとなく知っている。
そして突然、この息巻いているバエルの男
は、手に持っていたバドのビール瓶を割り、
修二に向かって構えたのだ。
「きやあー！ー」
今度は女の金切り声が響く。修二は少し悲
しそうな顔をして、首を小さく横に振って一
言つぶやいた。
「ハック：もうやめろよ……」
「スカシてんじゃねえー！ー」
ハックと呼ばれた男は、尚も興奮した様子
で、修二に襲いかかろうと踏み込んだ瞬間だ
った。修二の横に控えていた2人の女、しか
も双子が同時に飛び出し、一人がスラッと長
い右脚で、男の手にあるビール瓶を横から薙
いだや否や、もう一人が、胸元に強烈なサイ
ドキックを放ち、バエルを弾き飛ばした。そ

れは見事な連携だった。
 だが、当然それでは済まない。ヤラれた方
 の仲間がワラワラと集まって来て、その場は
 大乱闘に突入し、そのような様相を呈してきていた。
 「そろそろ、こりやヤバイな……」
 そんな風に思い、仲裁に入ろうかと考えて
 いた時、これまた修二の側近？ボディーガード
 ド？と思われる、身長2メートルはありそう
 な筋骨隆々のスキンヘッドが、バエルの数人
 を掌で弾き飛ばし、その場を制圧してしまっ
 た。
 「ははあ……。なるほど。鉄壁だね」
 そう、鉄の壁である。修二の近くには、常
 にこの3人が寄り添い、がつちりガードされ
 ている。さつき田城が言った事は、嘘ではな
 かった。そして一つ気付いた。
 「あっ……あの女共……さっきのXLCHとXR750
 だな」
 完全に見落としていた。だが今はっきりと
 確信した。何故なら、2人ともライダーズの

。

左肩エポレットに、赤いバンダナが特徴的な
 形で結ばれていたのだから。同時にもう一つ
 大事なことを思い出した。アレはその昔、俺
 達 SANTANA のメンバーがやっていた、仲間の証
 なのだ。
 なんてことだ。俺は捨てたつもりだったの
 に、修二は SANTANA の誓いを、いまだに守って
 いるんだ。捨てた？ いや違う、忘れようとし
 ていたんだ。永遠と言ったあの誓いを。
 「くそっーくそっっー」
 思わず舌打ちをしてしまう。
 修二、修二……。お前って奴は……。お前って
 奴はよお……。涙が流れそうだった。ああ、今
 いくぞ。
 「おろろい。修二イー」
 この際、その場の空気なんて関係ない。修
 二と話さなきゃいけない。あの誓いを。
 「おろろい」
 もう一度、人だかりの中から、修二に声を
 かけ、こう着状態のピリピリムードの中に、

ずかずかと割って入っていった。
 当然周囲はざわめき、全員が俺へ視線を集
 める。ふんっ、関係ない。俺は修二と話さな
 きやいけないんだ。
 「久しぶりじゃねーのよ。元気だったか
 ？」
 「下村：さん：」
 修二は、一瞬呆気にとられた顔をした。
 修二、お前は：お前は：。懐かしさと同時
 に、あの頃、俺達が味わった痛みも思い出す
 そしてそこに邪魔が入った。
 「おい！てめえどこのモンだあー」
 スキンヘッドの大男だ。邪魔すんな。俺は
 修二と話がしたいんだ。話さなきゃいけない
 んだ。が：。
 「うるっせえ一黙れええー」
 いけない。つい怒鳴りつけてしまった。違
 う、俺は修二に用があるんだ。
 「うがあああー」
 興奮の臨界点。スキンヘッドが言葉になら

ない奇声を発し、右拳を大きくスイングバツ
 クして、突然殴りかかってきた。
 「待てえええー！ー！二」
 修二の叫び声、だがもう遅い。まるで隕石
 の墜落だ。大上段からデカイ拳が、凄
 いスピードで落ちてくる。俺はその隕石の墜
 落に、左足から一步前に踏み出し、かがみ込
 むようにダッキングで隕石を交わした。それ
 間髪を入れず、強烈な右のボディアッパ
 ーを突き上げ、鳩尾の辺りに、拳を深々とめ
 り込ませてやった。
 スキンヘッドは体を“く”の字に折りなが
 ら、目を剥き苦悶の表情で、一度大きく息を
 吐く。次には膝が折れ、スローモーションの
 ように前向きに倒れ、そのまま立ち上がって
 はこなかった。
 「ちよつとアンター！ー！ー」
 XLCHとXRが、2人同時にステレオで叫んだ
 「おい、邪魔すんじゃないやねえよ」
 俺は少々凄みを利かせ周囲を睨みつけたの

。

だが、修二の仲間は臆することなく、俺の前に立ちはだかった。しかもすぐ目の前に現れた、まだる代と思われるガキは、瞳に涙を浮かべ、ガタガタと震えながら、“とうせんぼ”するように両腕を広げ、逆に俺を睨み返している。

「止めるんだ二」

威きり立つメンバーの前に、修二は割って入った。

「下村さんお久しぶりです。ほんと突然です。全く気が付きませんでしたよ」

それは冷笑だった。以前、あんなに明るく笑っていた修二からは、考えられないほどの冷たい笑みだった。

「急にこんな場面にまた……。おい、この人があのDef bustaだ。僕の先輩だよ」

更に周囲の空気が張り詰め、ざわめき立つ

「修二、あのな……」

言いかけた時、また邪魔が入った。

「オイーてめえー二」

。

バエルだった。後ろから左肩を掴んできた。
 『邪魔だ』俺は力任せに、左鉄槌のバック
 ハンドブローを顔面に飛ばし、一瞬で打ち倒
 した。
 「なんだあーてめえー」
 は？ なんだなんだコイツら……。
 「なんだって聞いてんだよコラアー」
 くっそ邪魔くせえ……。俺は更に違うバエル
 を、右フックで殴り飛ばす。
 「てめえー」
 「なめんなあー」
 次々、次々、ワラワラワラと、邪魔な
 バエルが湧いてきて、俺はあつという間に取
 り囲まれた。
 「ふざけんな」
 小声で呟いた。
 「ああーん？ なんだあー」
 「邪魔だ」
 更に小声で呟く。
 「ああーん」

。



う
う
く